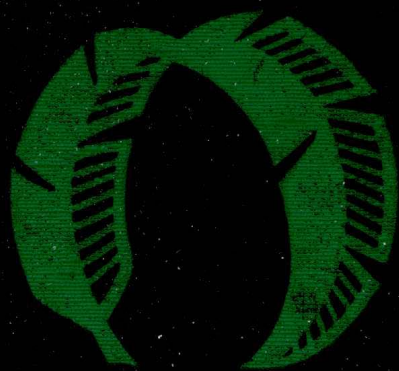


芭蕉翁句碑



おくのほそ道紀行三百年記念

芭蕉翁句碑

上野市
芭蕉翁顕彰会

芭蕉翁句碑

非売品

平成二年三月二十七日 発行

編著 芭蕉翁記念館

三重県上野市丸之内一七―一三

発行者 上野市

財団法人芭蕉翁顕彰会

三重県上野市丸之内一七―一三

印刷所 一進印刷株式会社

京都市下京区中堂寺壬生川町一七



芭蕉翁未身

卯觀子笠翁行年八十有二圖



「芭蕉翁句碑」の刊行にあたつて

「漂泊の詩人」といわれる松尾芭蕉翁は、元禄二年（一六八九）三月二十七日、江戸の草庵を人手に譲つて、「おくのほそ道」へと旅立たれたのでした。

その旅は、日光路から陸奥、出羽、北陸路を経て美濃の大垣に着いたのは八月下旬のことといわれています。

その道程六百里、日数にして百五十日に及ぶものでした。

すでに四十六歳の老境にあった翁は、親しい門人にあて「生死大事、無常迅速君忘れることなかれ。」と書きしめたためたように、病弱の身をいといながら、死さえも覚悟した旅でもあったのです。

なぜこれほどまでもして、難儀な旅を繰り返さなければならなかったのか、何事にも無事平穏を願うわれわれ現代人には理解し難いところがあります。

しかも、当時は江戸時代を通じて最も爛熟した元禄文化が華開いた時期でもありました。そうした華やかな社会に背をむけて、ただ一簑一笠の乞食行脚に出た反逆精神は、新しい詩情を拓こうとする詩人芭蕉のやむにやまれぬ使命感の発露であつたのでしょう。

この旅によって、翁は日頃敬慕してやまなかつた西行・能因など古人の詩心のなかに伝統の奥深さを探りながら、創造への門戸を開こうと挑んだのであります。

九月六日大垣に着いた翁は、伊勢の遷宮を拝するため再び旅立ちましたが、その後は故郷の伊賀上野に帰り、秋から冬にかけて二か月ほど滞在しました。

厳しい旅を終えた歎びを、兄半左衛門や伊賀の門人たちに、伝えたかったのでしょう。

旅の疲れを癒した翁は奈良、京都、近江の地を周遊しながら、旅によって会得した新らしい理念の構想にかかりました。

『猿蓑』『幻住庵記』『嵯峨日記』『卯辰集』などは、その間にうまれた傑作と言えるでしょう。

そして、やがて江戸に帰庵してからの翁は、いよいよ本格的に『おくのほそ道』の執筆にかかり、元禄七年四月、門人素龍に浄写を委ねました。

今年は『おくのほそ道』の旅から三百年になるので、翁ゆかりの各地では多彩なイベントがくり展げられます。

これらの地は三百年前、翁が旅したときに温かく迎えてくれた処でもあります。そして、翁が没した今も、敬慕と顕彰の念をもって「翁塚（芭蕉句碑）」を築き、「しぐれ忌」を催されています。

このたび『おくのほそ道』三百年を記念する催しの中で『芭蕉翁句碑集』を企画したのも、そうしたきづなを意図したのであります。

どうかこれらが永劫未来に芭蕉翁の心によって結ばれますことを念願してやみません。

平成元年十月 芭蕉祭の日

財団法人芭蕉翁顕彰会会長
上野市 今中原 夫

奥の細道芭蕉翁句碑

『芭蕉翁句碑』の刊行にあたって

芭蕉翁顕彰会長
上野市長

今 中 原 夫 2

素龍清書本「おくのほそ道」

解説「おくのほそみち」

46

芭蕉翁句碑解説

48

「おくのほそ道」足跡地図

54

伊賀の句碑

139

日光路

6

1 草の戸も住替る代ぞひなの家

2 行春や鳥啼魚の目は泪

3 あらたふと青葉若葉の日の光

9

4 暫時は滝に籠るや夏の初

5 夏山に足駄を拝む首途哉

6 木啄も庵はやぶらず夏木立

13

7 野を横に馬牽むけよほとゝぎす

8 田一枚植て立去る柳かな

13

奥州路

14

9 風流の初やおくの田植うた

10 世の人の見付ぬ花や軒の栗

11 早苗とる手もとや昔しのぶ摺

16

12 笈も太刀も五月にかざれ帟幟

13 笠島はいづこさ月のぬかり道

14 桜より松は二木を三月越シ

19

15 あやめ草足に結ん草鞋の緒

壺の碑

塩釜

22

松島

16 夏草や兵どもが夢の跡

17 五月雨の降のこしてや光堂

26

出羽路

- 18 蚤虱馬の尿する枕もと……………27
 21 まゆはきを俤にして紅粉の花……………28
 24 有難や雪をかほらす南谷……………30
 27 語られぬ湯殿にぬらす袂かな……………32
 30 象潟や雨に西施がねぶの花……………34

- 19 涼しさを我宿にしてねまる也……………28
 22 閑さや岩にしみ入蟬の声……………29
 25 涼しさやほの三か月の羽黒山……………32
 28 あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ……………33
 汐越や鶴はぎぬれて海涼し……………34

- 23 這出よかひやが下のひきの声……………28
 26 五月雨をあつめて早し最上川……………30
 29 雲の峰幾つ崩て月の山……………32
 暑き日を海にいたり最上川……………33

北陸路

- 32 文月や六日も常の夜には似ず……………35
 35 わせの香や分入右は有磯海……………37
 38 あか／＼と日は難面もあきの風……………38
 41 石山の石より白し秋の風……………39
 44 庭掃て出ばや寺に散柳……………40
 47 名月や北国日和定なき……………43
 50 蛤のふたみにわかれ行秋ぞ……………45

- 33 荒海や佐渡によこたふ天河……………35
 36 塚も動け我泣声は秋の風……………37
 39 しほらしき名や小松吹萩すゝき……………38
 42 山中や菊はたおらぬ湯の匂……………39
 45 物書て扇引さく余波哉……………41
 寂しさや須磨にかちたる浜の秋……………44

- 34 一家に遊女もねたり萩と月……………36
 37 秋涼し手毎にむけや瓜茄子……………37
 40 むぎんやな甲の下のきり／＼す……………38
 今日よりや書付消さん笠の露……………40
 46 月清し遊行のもてる砂の上……………43
 浪の間や小貝にまじる萩の塵……………44

伊賀の句碑

- 上野市……………140
 名張市……………178

- 伊賀町……………171
 その他……………180

- 大山田村……………173

おくのほそ道

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯を
うかべ、馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を柄と
す。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風
にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋、江
上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、や、年も暮、春立る霞の空に白川
の関こえんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまね
きにあひて取もの手につかず、も、引の破をつゞり笠の緒付かえて、
三里に灸すゆるより、松嶋の月先心にかゝりて、住る方は人に譲り
杉風が別墅に移るに、

草の戸も住替る代ぞひなの家



面八句を庵の柱に懸置。

弥生も末の七日、明ぼの、空朧々として、月は在明にて光おさまれる物から、不二の峯幽にみえて、上野谷中の花の梢又いつかはと心ぼそし。むつまじきかぎりは宵よりつどひて、舟に乗て送る。千じゆと云所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゝく。

行春や鳥啼魚の目は泪

是を矢立の初として、行道なをすゝまず。人々は途中に立ならびて、後かげのみゆる迄はと見送なるべし。

ことし元禄二とせにや、奥羽長途の行脚只かりそめに思ひたちて、呉天に白髪うらみの恨を重ぬといへ共、耳にふれていまだめに見ぬさかひ、若生もしいきて帰らばと定なき頼の末をかけ、其日漸早加と云宿にたどり

着にけり。瘦骨そうこつの肩にかゝれる物先まづくるしむ。只身すがらにと
出立侍いでたちはべるを、帟子かみこいちえ一衣は夜の防ぎ、ゆかた・雨具すみふで・墨筆すみふでのたぐひ、あ
るはさがたき銭はなむけなどしたるは、さすがに打捨うちすてがたくて路次ろしの煩わづらひと
なれるこそわりなけれ。

室むろの八嶋やしまに詣けいす。同行曾良どうぎやうそらが曰いわく、「此神は木この花さくや姫の神まうしと申
て富士一躰いつたい也。無戸室うつむろに入いて焼給ふちかひのみに、火々出見ほゝでみのみ
こと生れ給ひしより室の八嶋まうすと申。又煙えんを讀習よみならはし侍もこの謂いはれ也。」
将はたこのしろといふ魚を禁（起）ず縁記えんきの旨世はべりに伝ふ事も侍し。

卅日みそか、日光山の禁ふもとに泊とどる。あるじの云いひけるやう、「我名ほとけを仏五左衛
門と云。萬正直よろずを旨とする故に、人かくは申侍まうしはべるま、一夜いちやの草の枕
も打解うちとけて休み給へ」と云。いかなる仏ぶつの濁世塵土ちやくせじんどに示現じげんして、か、
る桑門さうもんの乞食順礼こつじきじゆんれいごときの人をたすけ給ふにやと、あるじのなす事

に心をとめてみるに、唯無智無分別にして正直偏固の者也。剛氣

木訥の仁に近きたぐひ、氣稟の清質尤尊ぶべし。

卯月朔日、御山に詣拝す。往昔此御山を二荒山と書しを、空海大

師開基の時日光と改給ふ。千歳未来をさとりに給ふにや、今此御光一

天にかゝやきて、恩沢八荒にあふれ、四民安堵の栖穩なり。猶憚

多くて筆をさし置ぬ。

あらたうと青葉若葉の日の光

黒髪山は霞かゝりて、雪いまだ白し。

剃捨て黒髪山に衣更 曾良

曾良は河合氏にして、惣五郎と云へり。芭蕉の下葉に軒をならべ

て、予が薪水の労をたすく。このたび松しま・象潟の眺共にせん事

を悦び、且は羈旅の難をいたはらんと、旅立暁髪を剃て墨染にさ

まをかえ、惣五を改て宗悟とす。仍て墨髮山の句有り。衣更の二字力ありてきこゆ。

廿餘丁山を登つて滝有。岩洞の頂より飛流して百尺、千岩の碧潭に落たり。岩窟に身をひそめ入て滝の裏よりみれば、うらみの滝と申伝え侍る也。

暫時は滝に籠るや夏の初

那須の黒ばねと云所に知人あれば、是より野越にかゝりて直道をゆかんとす。遙に一村を見かけて行に雨降日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明れば又野中を行。そこに野飼の馬あり。草刈おのこになげきよれば、野夫といへどもさすがに情しらぬには非ず、「いかゞすべきや、されども此野は縦横にわかれて、うろく敷旅人の道ふみたがえん、あやしう待れば、此馬のとゞまる所にて馬を返し給へ」

とかし待ぬ。^{はべり}ちいさき者ふたり馬の跡したひてはしる。独^{ひとり}は小姫^{こひめ}にて名をかさねと云。聞なれぬ名のやさしかりければ、

かさねとは八重撫子^{やへなでしこ}の名成べし 曾良^{なる}

頓^{やが}て人里^{ひとさと}に至れば、あたひを鞍^{くら}つばに結^{むす}付て馬を返しぬ。

黒羽の館^{くわんだい}代浄坊寺^{じやうぼうじ}何がしかの方に音信^{おとづ}る。思ひがけぬあるじの悦

び、日夜語^{にちやかたり}つゞけて、其弟桃翠^{そのたうすゐ}など云が朝夕勤^{つとめ}とぶらひ自^{みづから}の家にも

伴^{かた}ひて、親属^{かた}の方にもまねかれ日をふるまゝに、ひとひ郊外^{せうえう}に逍遙^{せうえう}

して犬追物^{いぬおふもの}の跡を一見^{いちけん}し、那須の篠原^{たすも}をわけて玉藻^{たまも}の前の古墳^{まへこふん}をと

ふ。それより八幡宮^{まうす}に詣^よい。与市扇^{よいち}の的^{まと}を射^まし時、別^{べつ}しては我国^{わが}氏神^{うぢがみ}神正^{しやう}

八まんとちかひしも、此神社^{この}にて待^はて聞^きば、感應^{かんおう}殊^{こと}しきりに覚^さえら

る。暮^{くる}れば桃翠^{（翠桃）}宅^{たく}に帰^{かへ}る。

修験^{しゆげん}光明寺^{くわうめいじ}と云有^{いふあり}。そこにまねかれて行者堂^{ぎやうじやだう}を拝^をす。



夏山に足駄あしだを拝かむ首途かど哉

当国たうこく雲岸寺うんがんじのおくに仏頂ぶつちやう和尚をしやうさん山居さんきよ跡あり。

堅横たてよこの五尺にたらぬ草の庵いは

むすぶもくやし雨なかりせば

と松の炭すすして岩いわに書付かけつけ待り」と、いつぞや聞え給ふ。其跡そのみんと雲

岸寺に杖ひけを曳ひば、人々すゝんで共にいざなひ、若き人おほく道のほ

ど打うちさはぎて、おぼえず彼禁かのきんに到る。山はおくあるけしきにて、谷たに

道遙みちはるかに松杉黒く苔こけしたゞりて、卯月の天てん今猶寒なほし。十景盡つくる所、橋

をわたつて山門いに入。

さて、かの跡はいづくのほどにやと、後の山うしろによぢのぼれば、石

上の小庵岩窟めうぜんじにむすびかけたり。妙禪師しきわんの死関ほふうん、法雲法師ほふうんの石室を

みるがごとし。

木啄も庵はやぶらず夏木立

と、とりあへぬ一句を柱に残待し。

是より殺生石に行。館代より馬にて送らる。此口付のおのこ、

「短冊得させよ」と乞。やさしき事を望待るものかなと、

野を横に馬牽むけよほと、ぎす

殺生石は温泉の出る山陰にあり。石の毒氣いまだほろびず、蜂・

蝶のたぐひ真砂の色の見えぬほどかきなり死す。

又、清水ながるゝの柳は蘆野の里にありて田の畔に残る。此所の

郡守戸部某の、此柳みせばやなど折々にの給ひ聞え給ふを、いづく

のほどにやと思ひしを、今日此柳のかげにこそ立より待つれ。

田一枚植て立去る柳かな

心許なき日かず重るまゝに、白川の関にかゝりて旅心定りぬ。い

かで都へと便たよりもとめ求しも断ことわり也。中なかにも此関このは三関さんくわんの一にして、風驟ふうさう^(驟)の人心ひとをとゞむ。秋風を耳に残し、紅葉もみじも倂おもかけにして、青葉こすえの梢えな猶なおあはれ也。卯の花の白妙しろたへに、茨いばらの花の咲さきそひて、雪にもこゆる心地こゝちぞする。古人冠(装)を正し衣い襷しやうを改し事など、清輔きよすけの筆にもとゞめ置おかれしとぞ。

卯の花をかざしに関の晴着かな 曾良

とかくして越行こえゆくまゝに、あぶくま川を渡る。左に会津根あひづね高く、右に岩城いはき・相馬さうま・三春みはるの庄しやう、常陸ひたち・下野しもつけの地をさかひて山つらなる。かげ沼と云所いふを行ゆくに、今日は空曇くもりて物影うつらず。

すか川の駅えきに等窮とうきゆうというものを尋て、四五日とゞめらる。先まづ「白河の関いかにこえつるや」と問とよ。「長途のくるしみ、身心つかれ、且かつは風景に魂くわいうばゝれ、懐旧きゆうに腸はらわたを断たて、はかゞしう思ひめぐらさ